

SER no.059; 序文

著者	須藤 健一
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	1-2
発行年	2006-02-24
URL	http://hdl.handle.net/10502/1876

序 文

オセアニア地域の文化人類学や民族学の調査研究は、日本においては1970年代から本格的に行われるようになった。これは、東南アジアやアフリカなどにおける学術的な調査研究に比べ、遅いスタートであった。そもそも、第二次世界大戦後、日本の民族学界における最初の海外学術調査は、1960（昭和35）年にインドネシアを中心に行われた。これは、財団法人日本民族学協会（旧日本民族学会、現在の日本文化人類学会の前身）の創設20周年記念事業「東南アジア稲作民族文化総合調査」である。

本書は、日本におけるオセアニア研究のパイオニアとして調査研究と多くの成果を残された石川榮吉先生の遺稿論集である。石川先生は、前述の「東南アジア稲作民族文化総合調査」の第二次調査隊のメンバーとして、バリ島とロンボク島で調査を行っている。そして、1962年には、神戸大学南太平洋諸島学術調査隊を組織して、ポリネシアのマルケサス諸島で社会人類学の調査を実施した。これは、戦後の日本における人類学者による最初のポリネシア地域のフィールドワークである。その後も、インドネシアのサダン・トラジャ、マイクロネシアのキリバスなどでも調査を続けてきた。石川先生は、オセアニアの広い地域で調査を行うと同時に、広範な文献研究に基づいて幾多の優れた研究を発表している。本書の論考も、石川先生のそのような研究活動の一環として生まれたものである。

石川先生の研究は、多岐にわたるが大きく四つに分けることができる。

ひとつは、メラネシアとインドネシア地域に焦点を当てた、村落共同体と母系社会に関する研究で、文化・社会的基盤を同じくする地域での社会構造の差異について生態学のおよび歴史的な視点から明らかにした。この研究は、1950年代から60年代にかけてのもので、「静態的」な人類学の視点と方法を批判した理論的研究で、その成果が『原始共同体—民族学的研究』（1970年）に著されている。二つ目は、前述したフィールドワークに基づく、社会人類学的研究である。バリ・ロンボクの村落構造、サダン・トラジャの葬送儀礼、マルケサスの家族・婚姻など、緻密なデータを分析した研究である。これは、日本人によるオセアニア初の民族誌、『南太平洋—民族学的研究』（1979年）にまとめられている。

三つ目は、西欧人の「ポリネシア観」に関するもので、西欧との接触期のポリネシアに関する歴史的な記述や資料に基づく1970年代の研究である。この一連の研究は、1985（昭和60）年に毎日出版文化賞を受賞した『南太平洋物語—キャプテン・クックは何を見たか』に代表される。四つ目は、石川先生が海外調査に出かけなくなった90年代に本格的に着手した、日本人の「オセアニア観」と「欧米観」についての研究である。この成果は、『日本人のオセアニア発見』（1992年）と『海を渡った侍たち—万延元年の遣米使節は何を見たか』（1997年）に集大成されている。

本書は、石川先生の前述の研究成果の三つ目に分けられるものである。本書の研究は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて、南太平洋にキリスト教の宣教団や貿易商などが押し寄せ、その社会が大きく変貌する直前の社会・政治体制や慣行を記述している点で学術的に意義がある。また、フィールドワークを行えなかった頃から、石川先生は、南太平洋の歴史や西欧との接触、そして人びとの生活と文化に関心をもち、欧米の文献資料を渉猟してきた。本書は、フィールドワークによる現地社会の現実と文献資料による知識とが、研究者石川榮吉の中でどのように接合されているかを知る上でも興味深い。そして、本書が歴史をどのような視点から、いかに捉えなおすかという、歴史人類学的な研究に役立つことを期待する。

2005年10月5日

須藤 健一
神戸大学国際文化学部
国立民族学博物館運営会議委員